

中国と日本における「魯迅と漱石」研究の史的考察 ： 魯迅と漱石の比較論の予備的研究

潘，世聖
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494473>

出版情報：比較社会文化研究. 6, pp. 35-43, 1999-10. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：



中国と日本における「魯迅と漱石」研究の史的考察

—魯迅と漱石の比較論の予備的研究—

潘 世 聖

はじめに

「魯迅と漱石」という比較文学的テーマに対する研究は、日本においては、早くも四十年代から中国近代文学研究者、魯迅研究者の手によって取り組み始められた。しかし、七十年代までに挙げられた成果は限られたものであり、厚味のある研究があらわれたのは七十年代、特に八十年代に入ってからである。また、研究者も従来の中国文学研究者のみならず、日本文学研究者も加わるようになった。具体的な研究としては影響関係の実証的な考察がほとんどであるが、実際的な影響関係があまり見られなくても、作品論・文学論のレベルでもっとのびやかに両方の作品を味わい、作品間の共通点や相違点を対比する研究があらわれた。

一方、中国においては、魯迅と漱石の研究は基本的に魯迅と外国文学の関係の一環として取り上げられてきた。その始まりは中国における社会情勢に関係して遅れ、八十年代の初頭になってやっとあらわれた。発表された研究論文としては、魯迅がどのように漱石に関わっているか、どんな面で漱石から思想的文学的な影響を受けたかという問題を中心として概略的に考察したものがほとんどである。日本についての資料が不足しており、また研究者の問題意識や研究方法も日本と異なるため、事実を徹底的に調査・究明する考察と綿密な作品論に基づく構造的比較研究には、すぐれたものがなかなか見られないのが今の現状だと思われる。

「魯迅と漱石」に関する研究は、中国と日本の異なった空間でそれぞれの状況の中でさまざまな様相を呈示しながら、いくつかの段階を経、少なくとも半世紀の歴史を持って今日に進んできたわけである。研究史の長さ比べ、その研究の量は決して膨大なものではない、にもかかわらず、これまで一度も整理・考察されてこなかった。したがって、ここにおいては「魯迅と漱石」に関する参考文献を網羅的読解し、今後、どんなレベルでどのような方法を持って魯迅と漱石との比較研究を行うべきか、そしてどのように魯迅と漱石との比較を通じて、魯迅研究及び漱石研究に新しい視点を提供できるかということを考えながら、これま

での日本と中国における「魯迅と漱石」の研究史を振り返り、その研究の変遷発展の軌跡を描出し、すでに解決したあるいは解決に近い問題や現時点における問題点を明らかにするとともに、今後の研究課題への展望を試みてみようと思う。

1

まず、現在確認の可能な魯迅と漱石の実際の関わりに関する資料から始めよう。

魯迅と漱石の関わりは、主に魯迅の日本留学期(1902～09年)の後半(1906～09年)に集中している。その頃、魯迅は予備学校に当たる東京弘文学院を経て、仙台医学専門学校に入り、二年足らずで医学を辞め、再び東京に戻り、もっぱら文芸活動に従事するようになった。いわゆる彼の文学者生涯の開始期である。現時点で、魯迅が文芸活動のスタートから漱石と何らかの関係を有していたことはすでに疑いのないものと言っても良い。しかしながら、この魯迅と漱石の問題だけでなく、これまでの魯迅の伝記において、一番の欠けているところと感じられることは、まさに彼が1917年の文学革命に参加する以前の事跡、特に日本における生活、文芸活動がはっきりしていなかったことである。⁽¹⁾それは弟周作人と比べると、まったく対蹠的である。周作人の場合、自ら日本留学(1906～12年)について数多くの資料(証言、回想、日記、書簡)を残しているのに対して、魯迅はわずかの「片言隻語」をしか書き残していないのである。ところが、幸いにも、弟周作人によって貴重な証言が残されている。

以下、現在確認のできるものを総括に見ておく。

(1) 魯迅自身の証言

1933年3月、「私はどのように小説を創作し始めたか」という文章の中で、魯迅は日本留学時の自分の愛読した外国作家を挙げて、こう語っていた。

当時、もっとも愛読した作者はロシアのゴーゴリ(N. Gogol)とポーランドのシェンキエヴィッチ(H.

Sienkiewicz)であった。日本のものでは、夏目漱石と森鷗外であった。(『魯迅全集』第6巻、吉田富夫訳)

そして、日本から帰国した後の1923年6月、魯迅と弟の周作人が共同訳した『現代日本小説集』が「世界叢書」の一つとして、上海の商務印書館から出版された。その中には、魯迅の訳した漱石の『懸物』と『クレイグ先生』、そして魯迅の書いた作者漱石の紹介⁽²⁾が収められている。それを通じて、少なくとも魯迅の漱石「観」あるいは漱石への取り扱い方の一端が見えてくると思われる。

(2) 周作人の証言

魯迅自身の記録より詳しいのは弟の周作人の回想である。1906年7月、母親の意志にしたがって魯迅は一時結婚のため帰国した。わずか数日後、周作人を連れて日本に戻ってきた。それから1909年の帰国まで、周作人は魯迅起居とともにし、魯迅の文学活動の最大の協力者ともなっていた。後日、魯迅の日本留学期における生活ぶり、文学活動などについて、周作人は最も詳細な証言を残している。例えば、「留学の回想」の中で、こう語っている。

私は初めて東京に行ったとき、魯迅と一緒に住んでいた。私たちの東京での生活は完全に日本化したものであった。(中略)私たちは普通の下宿に住んで、四畳半の一部屋には、本箱の他に一台の文机と二つの座布団しかない。学校に通うとき、学生服を着るが、ふだんは和服に袴をつけてそして下駄を履くばかりである。雨がふる場合、たまに革靴を履くが、後に私も下駄を履くようになってしまった。一日に下宿で二食で、学校のある時、弁当を持っていく。(中略)要するに、衣食住の各方面で私たちはすべて日本的な生活をしていった。それには不便とかをあまり感じていない、逆になれたら楽しくなるのである。⁽³⁾

魯迅と漱石との関わりに関連するものは以下の通りである。その一、1937年11月、すなわち魯迅が亡くなった一年後、周作人は「魯迅に関しての二」という回想文の中で、二十年前の東京時代の魯迅が漱石文学に接したことについて、次のように記している。

日本文学に対しては、当時は少しも注意せず、森鷗外・上田敏・長谷川二葉亭等、殆どその批評や訳文のみを重んじた。ただ夏目漱石は俳諧小説『吾輩は猫である』を作って有名であったので、豫才(魯迅の字—筆者)はそれが単行本になって出るとに買って読み、又『朝日新聞』に連載されていた『虞美人草』を毎日熱心に読んでいた。しかし島崎藤村等の作品は

全然顧みず、自然主義盛行時代にも田山花袋の『蒲団』と佐藤紅緑の『鴨』とを一読したきりで、あまり興味は感じなかったらしい。豫才が後日作った小説は漱石の作風に似てはいないけれども、その嘲諷中の軽妙な筆致は実に漱石の影響を相当強く受けているもので、その深刻沈重なる処はゴーゴリとシェンキウィッチから来ている。(周作人著、松枝茂夫訳『瓜豆集』300～301頁、創元社、昭和15年9月)

また、1952年に出版された『魯迅の故家』には、より詳しく記されている。

魯迅の日本における生活は、壬寅(1902)から己酉(1909)に至る前後8年の長きに及んだ。しかもその中間の2、3年は、中国人が一人もいない仙台に住み、日本の学生と一緒にくらししたので、彼の語学力は留学生の中でも相当なものであった。だが彼は日本文学には少しも興味を感じず、ただ夏目漱石だけに感心して、彼の小説『吾輩は猫である』『漾虚集』『鶉籠』『永日小品』から、無味乾燥な文学論まで全部買込んだ。さらにその新作『虞美人草』を読むために、『朝日新聞』を購読し、その後、単行本が出版された時、又、一冊買った。漱石の外は、ロシア小説を主に翻訳していた長谷川二葉亭と、南欧文学を紹介する上田敏博士に注目していた。この二人が創作を発表すると聞くと、毎日、新聞に連載される『平凡』と『渦巻』の二小説を読んだが、実際は、彼の関心の的は作者であって、作品ではなかったから、その単行本をかおうとはしなかった。彼がなぜ漱石を愛読したかという問題には今は触れずにおく。要するに彼は好きだったのである。その後、彼は日本の文学者数名の小説を翻訳したが、その中で、『クレイグ先生』の訳が最もすぐれていると思う。(周遐壽〈周作人〉著、松枝茂夫・今村与志雄訳『魯迅の故家』279～280頁、筑摩書房、昭和30年3月)

魯迅の漱石受容に関して、次のような証言もある。「魯迅の小説から明瞭な『吾輩は猫である』の痕跡が見えないにもかかわらず、そこから多少の影響を受けたことも、生前に魯迅自らも認めているのである」。⁽⁴⁾

魯迅の東京における生活に立ち会った人は、その弟の周作人の他に、友人の許寿裳、錢玄同などがいるが、錢玄同はほとんど回想を残さずして死去し、許寿裳のものは戦後二三出版されたが、いずれも断片的で、まとまったものとしては、さきの周作人の回想文及び『魯迅の故家』、『魯迅小説中の人物』及び『魯迅の青年時代』三冊におけるエッセイ数編しかない。もちろん、東京における二年あまりの

間、兄弟として、周作人はずっと魯迅と一緒に住んで、一緒に文学活動もしていた。彼は魯迅を一番よく知っていた。これについて、周作人自身も自慢している。「魯迅の学問と芸術との来源は外の人に知られていないことが大々あり、弟（周建人）は当時まだ幼くて聞知しなかったし、私の知っているところは既に海内の孤本となり、記録しておくに値すると確信するからである。事は微細であるが、虚誕でない。世の識者は必ず取られる所があると思う。」⁽⁵⁾しかも、周作人自身も、後に中国新文学の中で重要な位置を占める文学者となり、彼の経歴、温和な性格、そして回想文章における淡々として穏やかな叙述の風格などによって、彼の回想は信頼性の高いものとされている。この点について、日本の研究者も気づいており、「（魯迅の）弟の周作人も一九六七年になくなってしまった以上、あまり信頼できる情報源はもうそうないのかもしれない」⁽⁶⁾と述べたこともある。今日魯迅と漱石の実際な関係を考察する際、魯迅自身の片言隻語を除けば、周作人の証言はほとんど唯一のものとして、不可欠で貴重な資料として取り扱われ、しばしば研究者に引用されるようになった。

(3) 他の人による回想

かつて北京大学で魯迅の講義を受けたことがある文学者孫席珍は1981年に書いた「魯迅と日本文学」の中で次のように回想している。

魯迅が北京大学で『中国小説史』という講義をしたとき、夏目に触れたことがあることを覚えている。漱石は現在に執着し人生を愛している。そして、人生に対する態度が一貫してまじめなものであり、旅先の食事さえも決していいかげんなことをしない。汽車に乗るときでも船に乗るときでもテーブルが小さいにもかかわらず、必ず茶碗、箸などをきちんと並べて食事をしたという。⁽⁷⁾

2

「魯迅と漱石」というテーマについては、日本研究者による研究の方が中国より早く始められた。周知のように、日本においては、戦後から五十年代のなかばまで、魯迅が広く読まれ、そしてさかんに論じられ、「魯迅と漱石」の研究もその一つの課題として行われたのである。その理由は、中国文学研究者の丸山昇が指摘しているように、「魯迅への日本の読書界の関心を高めたのが何であったかといえば、中国革命の成功、中華人民共和国の建国によって、日本の進歩的人士の中国への関心が高まった……特に魯迅に限定していえば、やはり竹内の影響が大きかったといわねばならない」⁽⁸⁾。また、竹内好の魯迅論、現代中国論に

ついて、氏は次のように述べている。

魯迅は竹内によれば、日本の「近代」とは異質の近代を実現した中国の特徴を体現する文学者・思想家であり、それ自体、日本近代に対する批判であり、鏡なのであった。竹内によるこのような魯迅像が、戦後まもない日本で、大きな影響力を持ったのは、あの戦争をもたらすことになった日本「近代」とは何であったのかをふり返り、またそれを阻止し得なかった側の弱点は何であったのかを真剣に考え、また逆に、あの戦争を通して新中国として再生した中国に対する驚きと敬意をいだいていた日本の人びとの心を、それがとらえたことであったろう。⁽⁹⁾

竹内好の魯迅論における魯迅及び中国文学への傾倒は、単なる紹介者のそれではなく、中国の歴史と文学、とくに魯迅の文学精神と処世を学ぶことによって、日本の文学・思想の根源的改造を希求するという、ほとんど絶望的にまで熱烈な志向に貫かれていると言えよう。そのような時代的雰囲気の中で、魯迅と漱石というテーマが含まれる魯迅研究が数多く出始め、そしてほとんどは魯迅に対する肯定的かつ礼讃的な方向に向かっている。これは後の魯迅研究との大きな相違点とも言える。

魯迅と漱石に関しては、早くも五十年代に「漱石と魯迅」（『日本文学』第3巻第4号、1954年4月）というタイトルの論文が出ている。著者はまず漱石と魯迅の間に多くの共通点のあることを注意している。「生い立ち、貧窮の中の学問、留学の結果としての民族的自覚、知的文学の展開、人間存在の尊厳に対する意識、世相批判と人間性分析の眼、文筆稼業に対する割り切った考え方、研究的性格と啓蒙的性格等々——これらの一つ一つに共通するものがある」と強調している。具体的には、「両者の共通点のうち、二人の初期の文学精神において重要な地位を占める寂寞と呐喊について近代精神史研究の立場から考察し、民族形式検討のための一問題を提起」した。また、「日本文学と魯迅」（千田九一、『文学』第24巻第10号、1956年10月）という論文は直接に「漱石と魯迅」と名付けてはいないが、周作人の回想を手がかりとして、魯迅と日本文学の関係、特に漱石も含む日本文学翻訳・受容について概略的に考察している。そして、竹内好の魯迅論と同じように、魯迅の日本文学受容の仕方に注目している。

かれら（魯迅と周作人——筆者）の日本文学紹介の態度が、いかに真摯で自主的なものであった……。多少なりとも、理想を追い求めるもの、理想と現実のくいちがいに苦しく身もだえるもの、生きる希望に燃え

るもの、人生の矛盾を直視するもの、そして何より、自分たちの民族の前途や社会の改革にとって切実と思われるもの、——そういった性格の作品に対する選択と吸収をかれらはますます強め、深めて行ったのである。

著者の把握した魯迅の日本文学受容の重要な特徴は同様に魯迅の漱石受容にも現れている。

また、1955年に、山本東作の『『クレイグ先生』と『藤野先生』』と永島靖子の『『阿Q正伝』と『坊ちゃん』』という直接に魯迅と漱石の作品を比較文学的に論じる二本の論文が『魯迅の友会会報』に掲載されている。

3

五十年代後半から、日本及び中国の社会、政治、文学の状況がかなり変わったことによって、日本の研究者は次第に中国と日本との現実の差を自覚して、魯迅や中国文学に対する直接的な共感のみに頼っている訳にはいかず、もっと冷静で学問的に魯迅を考えるようになったのである。「魯迅と漱石」に関する具体的な問題を考察した研究を見ると、魯迅の「藤野先生」と漱石の『クレイグ先生』の関係が長い間研究者たちの関心を呼んでいた。七十年代に入って、それに関するすぐれた研究が日本人研究者によって発表された。それは広い視野にたって夏目漱石とクレイグ先生、魯迅と藤野先生との関係に取り組んだ論文『クレイグ先生と藤野先生——漱石と魯迅、その外国体験の明暗』（平川祐弘、『新潮』第70巻第2号、1973年2月）である。

論文は百九十頁に達する長文であり、「夏目漱石とクレイグ先生」「魯迅と藤野先生」「魯迅と漱石先生」の三部で、構成されている。作者自ら述べているように、論文は単なる比較文学研究だけでなく、「後進国の近代化とその心理の一研究として」、さらに「幅の広い比較文化史的な枠組の中で」漱石の英国留学と魯迅の日本留学を再考し、「漱石と魯迅の並行伝を試みてみた」ものである。作者は二人の共通点、例えば「後進国の出身者が先進国へ留学して、そこで覚える人種的・文化的な劣性コンプレックスの問題」、二人のそれぞれの自分の先生に対する「情合」などを論じた上で、さらに魯迅の日本留学についての資料の乏しさを越えるために、「漱石のイギリス体験を一つの参照基準として、魯迅の日本体験を見直した」のである。漱石とクレイグ先生、魯迅と藤野先生について綿密な考察を行った他に、魯迅の『藤野先生』と漱石の『クレイグ先生』の関係に関しても、次のような見解を示している。

魯迅の『藤野先生』は漱石の『クレイグ先生』に刺戟されてできた作品なのではなかろうか、『藤野先生』

は『クレイグ先生』の創造的模倣なのではあるまいか、という推定である。

魯迅は『クレイグ先生』から感情の上で刺戟を受けて、同一の枠組みを借りて自分の作品である「藤野先生」を創ったので、その関係は刺戟伝播といってよい心理現象だろうと思う。

この見解は、後に中国の研究者にも受け入れられるようになってきた。⁽¹⁰⁾この論文はいろいろな意味でさまざまな問題を提起した大作であって、後の魯迅と漱石の比較研究に大きな示唆や影響を与え、これ以降同じ方向で同じ課題を研究するあるいはそこから示唆を受け、提起された問題を具体的に探究する研究が複数あらわれたのである。

七十年代の後期から八十年代の半ばまで、日本の「魯迅と漱石」研究は新しい段階に入ってきた。それは二種類の魯迅と漱石に関する比較研究の専門書が世の中に送り出されたことに示されている。それは檜山久雄の『魯迅と漱石』（第三文明社、1977年3月）と藤井省三の『ロシアの影——夏目漱石と魯迅——』（平凡社、1985年4月）の二冊である。

『魯迅と漱石』の構想について、著者檜山久雄は次のように説明している。魯迅の思想を見ると、東洋の近代化、すなわち東洋という独自の場での近代の創出という課題が、彼の心の奥にひそんでいると言ってよい。一方、日本の場合、圧倒的な模倣文化に目を曇らせることなく、さらには自分の文学によって自前の近代を創出しようとした文学者はほとんど夏目漱石しかいなかったのである。そのため、「魯迅という中国の文学者をとおして東洋における近代の問題を考えているうちに、東洋的近代の創出という私の問題関心にふれてくる日本の文学者として、夏目漱石が浮かんできた」。そのため、「東洋的近代の創出という自分の仮説に基づいて、課題を共有した二人の文学者の営為の跡を検証し」、「同じ課題を彼らがそれぞれにどのように追究し深化させていったかを検証する」ことにした。つまり、著者の意図は、魯迅と夏目漱石のそれぞれの文学の検証を通じて、彼らの東洋的近代化の創出という課題への対応を構造的に解明しようとするにあつたと言える。

著者は具体的にいくつかの問題点を提起している。例えば、魯迅と漱石は「異人種思想」からではなく、あくまで自分たちの現実から出発して自前の近代を創出しようとした作家であり、その現実を表現するのに「異人種思想」をそのまま借用しなかったということを論じている。そして、日本留学時代の魯迅がなぜ漱石にひかれたかについて、「おそらく魯迅は、そのような漱石の姿勢のなかに、あくまで中国の人生に固執した自分の経験に照らして、ある親近感を覚えたのにちがいない」と推測している。さらに魯

迅と漱石の思想的相違について、次のような見解を打ち出している。「魯迅の文学にあって漱石の文学にない最大のものは、革命という発想である。魯迅にとって近代の実現は革命抜きに考えられないのにたいして、漱石における近代の志向には革命という断絶の契機は含まれていない。」この考えは後に反撥をもまねいている。なお、自己解剖について、「魯迅の自己解剖は、あくまでも社会化された自己の分析・解剖であって、その奥にある個人の深層にまではとどかない」と指摘している。

当然ながら、本書の結論についてはなお具体的に検討すべき点があるだろう。しかし、統一的視点の下で、単なる影響関係にこだわらず、構造的な立場から二人の文学者の近代化への対応を本質的に究明しようとしていること自体は魯迅と漱石の比較研究にとって大きな意義があり、他の研究者にも大きな示唆を与えたと思われる。

『ロシアの影—夏目漱石と魯迅—』は、著者藤井省三の説明によれば、次のような基本的認識に基づいたものである。「漱石と魯迅は、ともに日露戦争後の状況において東洋がいかなる近代を創出すべきかという自らの思想的課題を自覚し、これを文学の領域において、もっとラディカルに追求した文学者であった。二人の思想的営為において、個の主体性の確立は大きな問題であったし、また状況に対する深い洞察は二人をして内面世界の孤独に導いたのである。このような漱石と魯迅の視界に捉えられた先駆的営為がアンドレーエフ文学であったのだ。」⁽¹¹⁾具体的には、明治日本の文学風土にあって、漱石は早くからアンドレーエフ文学の本質を見抜いていた。それは漱石において「文明の革命」というテーマが一貫していたからである。漱石の日本近代に対する批判的視座が確立されるのは、代表作『それから』においてであるが、この作品こそ最も色濃くアンドレーエフの影響を受けたものなのである。一方、1902年日本に留学して以来、魯迅は中国の社会状況に強い関心を抱き続け、ロマン派詩人論を軸とした独自の文学論を展開しつつ近代的自我の発見へと進む。その過程で遭遇したのが孤独な内面世界を描いたアンドレーエフ文学であった。

また、これまで漱石については則天去私説が、魯迅については革命の聖人といった硬直した評価がなされてきたが、著者はアンドレーエフの受容を中間項として、漱石と魯迅の文学的営為を比較研究するという新しい角度からの接近を試みたものである。ただ、本書はあくまでも主として直接に漱石と魯迅を比較することではなく、むしろアンドレーエフへの対応を通して、間接的に二人の思想的文学的営為を比較した研究になっていると言えよう。本書に対して、後に反発する見解も出されてきたが、しかし、著者の「漱石と魯迅を覆う神話のヴェールを取り去り」「両者の文学的思想的営為の真相を認識」しようとしたことが学

問研究にとっては重要なことだろう。

4

中国においては、魯迅と日本文学に関する研究のスタートは非常に遅れていたが、しかし日本人による研究に早くから注意を払っていた。例えば、魯迅生前の1931年にも、中原野昌一郎という人の、魯迅と金子洋文を対比的に扱っている内容を含む「中国新興文芸と魯迅」（唐生訳、『山東省立第三師範旅平校友会季刊』創刊号、1931年10月10日）がすでに翻訳され、中村光夫の「魯迅と二葉亭」（陳鉄光訳、『西北風』半月刊1936年第8、9、10号）も1936年に中国に知られ、そして一定の反響を生んだ。ただ、中国の研究者による魯迅と日本文学についての専門研究はなかなか行われず、八十年代に入ってから、こうした状況に変化が生じた。

孫席珍の「魯迅と日本文学」（『魯迅研究・5』、中国社会科学出版社、1981年12月）は、はじめて正面から魯迅と漱石の関係問題に触れたものと言える。彼の論文には、魯迅が漱石の『懸物』と『クレイグ先生』を翻訳したことをはじめとして、その経緯、作品の大筋などが紹介され、後日の『藤野先生』が何らかの形で『クレイグ先生』と関わっているのではないかという判断が示されている。特に魯迅はなぜ漱石の「余裕のある小説」という主張に興味を示していたかについて、魯迅の見解を引用して、自分なりの理解を提出し、興味深い結論を出している。「魯迅は“〈余地を留めざる〉空気にとりかこまれては、人々の精神もたぶん小さく押しひしがれてしまうだろう”と述べ、……“人々が余裕の心を失うか、無意識のうちに余地を留めぬ心ばかりを持つようになれば、その民族の将来がおそらく考えるものだ”という結論を下した。ここで、魯迅がこのような高いレベルで“余裕”の意義を捉えたことをわれわれはよく吟味しなければならないのである」⁽¹²⁾。確かに、魯迅のこのような考えが漱石に共感を生じたきっかけになったかもしれない。しかし、この論文の重点は資料の掘り起こしや詳細な考察と論証ではないため、自分の思いに即して、感想風な論を進めることで終わっており、厳密な論証はなされていない。

戦前に日本に留学した体験のあった林煥平は「魯迅と夏目漱石」という論文の中で、魯迅と漱石のそれぞれの時代・生活・思想を論じ、はじめて「魯迅と漱石の気質と天分は非常によく似ている」が、「この二人の作家を生んだ社会環境が甚だしくちがっているところから」二人の相違点が形成されたという見解を示している。作品の面で、二人の異なった個性に触れるとともに、「坊っちゃん」の清と「阿長と山海経」の阿長の共通点に注目した。特に『夢十夜』

と『野草』の関係の比較問題を提起し、「両者はともに象徴的手法で書かれた散文詩である。そして両者はともに夢幻の世界を描くことに重点をおいている。また両者はすぐれた作品であるがかなりわかりにくい内容を有している。これは共通したところである。両者にえがかれている夢幻の世界は同じではない。これが相違点である。しかし両者の関係を研究するには頗る興味がある。」作者はこうした点について綿密な追究が出来てはいないが、一つの重要な問題の提起をなし、後の研究に糸口を開いたと言える。こうした理由からか、論文は発表された翌年、日本でも訳されたのである。

1985年、中国では『鲁迅と日本文学』をタイトルとした専門研究書がようやく世の中に送り出された。同書では、青年期の鲁迅の思想と日本、青年期の鲁迅と日本のロマン主義文学、鲁迅と白樺派作家、鲁迅と厨川白村、鲁迅と日本新思潮派作家、鲁迅と日本プロレタリア文学などをめぐって、さまざまな問題について、整理・検討が加えられ、鲁迅と日本に関する問題についての総合的な成果が挙げられた。同書の第三章「鲁迅と夏目漱石」には、それまでの中国と日本における関連資料や研究成果を網羅的に吸収した上で、鲁迅と漱石の関係について整理を試みている。そして、『阿Q正伝』と『吾輩は猫である』、『野草』と『夢十夜』の概略的な比較を通じて、鲁迅がどのように漱石から影響を受けたかを明らかにしようとしている。他には、鲁迅文学と漱石文学の異質性に関しても見解を述べている。しかし、限られたペースの中で、様々な問題に触れたため、より詳しい考察や深い追究に至らなかったのが実情だと言えよう。

九十年代以降、資料発掘がほとんど限界に達している状況の下、若手研究者たちはなんとか研究停滞の局面を破って新鮮な風を吹き込もうと新たな探求を始めた。発表された論文から見ると、彼らのアプローチは限られた資料の解説の反復でもなく、単純な影響研究でもなく、より文学理論的な次元で鲁迅と漱石の比較を通じてそれぞれの作品を味わい、新説を引き出した上で、作者の主張を発展・昇華させようとする点が顕著な特徴と思われる。

程麻の「夏目漱石の風刺精神と鲁迅の能動的文学観——文学における倫理的効能優勢について」（同氏の『溝通と更新——鲁迅と日本文学の関係の考察』、中国社会科学出版社、1990年）は、当初、青年鲁迅が漱石の『吾輩は猫である』に魅了された内的思想原因は単に漱石の低徊かつ俳諧的特徴と風刺的趣味にあるだけではなく、むしろ漱石の文学における倫理的効能を重視する能動的文学観に強い共感を感じたからであるという。さらに著者は鲁迅と漱石の文学観に大きな共通点があるとし、次のように語っている。鲁迅と漱石はともに文学が社会生活に直面すべきであるという

信念を抱いており、「ともに人間と社会生活との間の矛盾を表現しようとし、さらに人間の魂を改造することを通じてその矛盾を解決し、社会現実を進歩させる。（中略）文学の倫理的効能を強調することは鲁迅と漱石が近代東方で起こした文学観念の変革であり、彼らの文学における関係中最も根本的なものである」。この見解にはある種の新鮮さが感じられるが、如何に漱石の文学観の特質を正しく把握するのかという点で問題がある。著者は鲁迅と漱石の文学観に共通点を見いだしているが、筆者にとっては、そここそ二人の文学認識の重大な相違点が存在しているのではないかと常に感じており、また、このような文学観は初期以後の漱石の作品を考えると、かなり変化したのではないかと思わざるを得ないのである

同じ文学思想の問題であるが、王向遠の「〈余裕〉論から見た鲁迅と夏目漱石の文芸観」は、鲁迅が〈余裕〉論という点で漱石文学を捉え、さらに漱石から〈余裕〉という用語を借り入れ、自分の文芸観を表す重要な概念として利用したと述べる。鲁迅と漱石における〈余裕〉の意味について、「鲁迅と漱石にとって、〈余裕がある〉というのは一種の審美的態度であり、つまり主体を自由自在の精神的優位に位置させ、焦らずに、余裕を持って客観の対象を観察し描写する」ということであると、この論文は解釈している。論文全体としては説得力が感じられるが、漱石の〈余裕〉という特徴の理解に一種の恣意性も見られると思われる。

文学思想（文学観）についての研究の他、『野草』と『夢十夜』の比較が依然研究者の関心を呼んでいる。その理由はやはり両作品の間に「夢」という点で類似性があるということだろう。1991年、最も権威ある全国誌『文学評論』に「鲁迅と漱石の散文詩に関する比較研究」をテーマとした論文が発表されたが、その論点は『夢十夜』と『野草』の異同に集中している。その後、「鲁迅の『野草』と夏目漱石の『夢十夜』——散文詩の文体的比較」⁽¹³⁾が、同じ散文詩としての芸術手法の面で、例えば夢の語り、仏教文化に関連する象徴、「虚無」の体験、死亡のイメージという点で両作品の共通性を捉えており、最終的に『野草』の力強い文体と『夢十夜』の朦朧さや冷静さに長じた文体がともに東洋的なものだ結論づけている。これらの論考にはいくつかの新鮮な見解が示されているが、具体的な論証はなお不十分ということが一つの問題点だと思われる。

5

八十年代以降、日本における「鲁迅と漱石」の研究（当然に日中国人研究者の日本語による研究も含まれる）は、さらに進み、より多様でかつ柔軟な視角からの研究、例えば翻訳論、表現論、思想論による研究が相次いで出された。

「魯迅の『クレイグ先生』——中国語訳に就て——」(林連祥, 『比較文学研究』41, 1982年4月)は、題名の示すように翻訳論の角度から魯迅の行った日本語から中国語への『クレイグ先生』の翻訳本文に即して、精密に是正と批判を行った。今日の立場から見ると、その魯迅の中国語訳文に対する分析と批判には納得できると思われる部分も存在するが、しかし、言語自体が固定的なものではなく常に流動性・変動性を有しており、かつ翻訳はさまざまな文化的な要素にも関わって単なる言葉の置きなおしだけでないことを考えれば、この論文の文化感覚や歴史感覚の不足という問題点を指摘せざるを得ない。その他、在日留学生であった林叢の「中国における漱石の受容——魯迅訳『クレイグ先生』をめぐって——」(『比較文学研究』第48号, 1985年)という論文は、おそらく前記の平川弘祐論文から魯迅の『藤野先生』は漱石の『クレイグ先生』の創造的模倣だとする議論を受けて、『クレイグ先生』とその魯迅訳及び『藤野先生』、特に翻訳における具体的な訳語の検討に力を入れて分析したものである。

もう一つ注意すべき動向として構造的なレベルでの比較研究がある。これまでは漱石と魯迅の具体的な作品についての研究は、ほとんど漱石の魯迅への影響という点に集中しており、厳密な意味での構造的なレベルでの比較研究は全く行われてこなかった。八十年代中期になってから、ごくわずかであるが、こうした局面がようやく変わり始める兆しが見えてくるようになった。1986年に出版された『近代文学における中国と日本——共同研究・日中文学関係史——』(汲古書院)に収められた『『草枕』と『故郷』——樂園喪失をめぐって(付録:『坊ちゃん』と『阿Q正伝』)』という論文はその一つである。著者が日本近代文学者であるので、その立場や視点から新鮮な見解を示している。論文はまず両作品は「それぞれ自然の中の桃源境、故郷という名の樂園を喪失する話である」という論点を明確に提出して、自然と非人情の視点から『草枕』を論じており、また『故郷』と寂寞の問題を中心として、これまでの観点を踏まえた上で独自の捉え方を提示している。例えば魯迅の「寂寞」に対して、「わたしの見る魯迅においては、〈寂寞〉という民衆からの孤絶を自分の内に確認した時、新しい連帯を求めて思想的に歩み出すので、そういう文学者の自覚が〈寂寞〉であった。」そして、「魯迅と漱石を比べると、士大夫的な知識人の文学という点で似ている。樂園喪失に文明批評を展開するところまでは同じだが、漱石では自然に向かって一つの見方を要請するように、またそれがもともと画絹の上には存在しないように、はじめから樂園は失われており、那美さんの画像作りに、つまり芸術としての再生に向かっている」、「樂園喪失を同じく確認しながら、一方は全く現実をあきらめて芸術的完成に向き、他方は思

想としてはあるが、現実での実現に向けて開かれている。わたしの言いたかった二作品、二作家の相違はこれである」と、著者は述べている。付録の『『坊ちゃん』と『阿Q正伝』』という論文の中において、著者は両作品の間に「影響とか模倣とかはなくとも、比較しておもしろい存在と思われる。共に、革命英雄譚であり、文明批評である。いいかえれば、典型的な人間の造形を通して国民性をえぐり出している」という見解を示している。

他には、『吾輩は猫である』と『阿Q正伝』の比較を取り上げたものもある。『『吾輩は猫である』と『阿Q正伝』——両作品の笑いの性質について——(趙建新, 『立命館文学』第546号, 1996年8月)は、「漱石の『吾輩は猫である』の笑いを、魯迅の『阿Q正伝』という作品に現れている笑いと比較する視角で、両作品の笑いの深層まで考察を進めたい」というモチーフを持って、両作品がそれぞれの国の近代文学におけるユーモア小説の代表作であるという共通点を押さえながら、二つの笑いの質及び効果の違いについて、両作品の笑いはともに人間社会に対する不平不満及び絶望から生まれたものであるが、しかし魯迅と漱石の反逆の立場と対象は全く違うという結論を引き出している。

また、1993年10月に二種類の魯迅と漱石の比較研究専門書が一斉に出版されたことが挙げられる。李国棟の『魯迅と漱石——悲劇性と文化伝統——』(明治書院)と林叢の『漱石と魯迅の比較文学研究』(新典社)である。おもしろいのは同じ研究対象に対して二人の著者が全く異なった扱い方をしているという点である。李著はスタイルの面で檜山久雄の『魯迅と漱石』に似ていると感ぜられる。李著は全書には主に以下の問題を取り扱っている。つまり、それぞれの時代背景の比較として、魯迅及び漱石の誕生年代と誕生国土の悲劇、西洋近代個人主義と魯迅の悲劇の発生及び漢学と漱石の悲劇の発生、絶望の「確信」と初期魯迅文学及び道德通念と初期漱石文学、「無」と中期魯迅文学及び「無論理」と中期の漱石文学、「野草」と『夢十夜』、「無」による「擾乱」と晩期魯迅文学及び「自然の論理」と晩期漱石文学という構成になっている。李著の構想は大きく、それを統一する視点もあることは一つの特徴だと言える。しかし、構想の大ききの代わりに、具体的な問題についての追求と論証がないぶしにされ、特に作品をめぐる解明がほとんど展開されていないため説得力に欠けると思われる。また、比較文学の視点からどのように両者の接点を絞り込み、どのように単なる両者の論の並列となることを避けるのかということに慎重にならねばならないことを感じさせた。

林叢の『漱石と魯迅の比較文学研究』は、実証的な方向に向かっている研究である。特に翻訳における具体的な訳語の検討に力を入れている。全書の内容は二部構成になっ

ており、第一部「漱石文学と魯迅の受容」、第二部「魯迅文学と日本の受容」と、それぞれ日本から中国、中国から日本という方向で論じられている。第一部では『クレイグ先生』とその魯迅訳、及び『藤野先生』の分析を通して、魯迅は漱石の作品について、作者が表現しようとする主題とそれに関わる人物描写や状況描写に注目し、作品に現れる漱石の文学態度を肯定的に受け止めているという考えを提示している。そして、『夢十夜』の「第七夜」と魯迅の『野草』の「過客」の共通点、相違点をも考察している。第二部では、『藤野先生』の増田渉訳と竹内好訳を二訳者の魯迅観を視野に入れながら検討する。特に増田渉と竹内好がそれぞれどういう点であるいはどういう立場で魯迅の作品に共鳴するようになっていったかについての説明は具体的な作品の翻訳から緻密に分析しており、非常に示唆的である。しかし、すでに指摘されているように、この本の実質の内容を考えれば、「比較」の意味はかなり薄いと言えるだろう。つまり、「第七夜」と「過客」の比較を除き、基本的に「魯迅の比較文学的研究」となっているのは明白なことと言えよう。著者は以上紹介したような研究方法を持って、その研究の範囲を広げながら引き続き魯迅の漱石受容に取り組んでいるようで、「魯迅と白村、漱石」(『比較文学』第37巻、1995年3月)が挙げられる。

終わりに

以上、「魯迅と漱石」の研究は時代の変遷につれ変化し五十年の時を経てきた。この間、魯迅と漱石の関わり、魯迅の漱石受容などの問題が中日の研究者によって伝記・翻訳史などの角度から究明され、すでに相当の成果が挙げられている。しかし、例えば、魯迅と漱石の実際の関わりということに関してでもあるが、魯迅が漱石から相当の影響を受けたことは魯迅自身や周作人の証言によって明らかになったが、その影響・受容の過程、具体的な様相という点になると、より具体的な証拠資料、特に一次資料が乏しく、今まで以上の緻密な証明は容易ではなく、こうした研究にはもう限界性がはっきりと感じられるようになってきている。今後新しい資料が発見できるか、どのように進んでいくかということが注目される。翻訳あるいは翻訳史による研究もその実証的性格によってその比較研究の基礎を築いているところであるが、魯迅の漱石翻訳はただ『クレイグ先生』と『懸物』二篇しかないで、以降、研究の余地がどの程度残っているのかについて疑問を抱かざるを得ない。

精緻な受容・影響関係に関する研究を踏まえ、理論上の新しい問題意識を持って作品論・思想論の次元から構造的に比較を行い、新しい問題を浮き彫りにし、より根本的に

二つの文化に属する文学者及びその文学の本質を捉えることはおそらく大きな可能性のある領域だと思われる。これまで例えば檜山久雄、藤井省三、米田利昭などの究明が価値に富んだ試みとしてすでにこの角度から研究に糸口を開いていると言える。以降、広い視野をもって実証的に二人の文学者の関係を考察し、さらに比較という方法を通じてそれぞれの文学者の根底にある普遍的な本質を明らかにすることによって、「魯迅と漱石」研究が一層発展していくことが予想される。

注

- (1) 仙台医学専門学校留学期(1904年9月～1906年3月)の魯迅について、すでに『仙台における魯迅の記録』(仙台における魯迅の記録を調べる会編、平凡社、1978年2月)が出版され、数多くの関係資料を集め、貴重な価値を有する労作として高く評価されている。
- (2) 魯迅『現代日本小説集』付録：作者に関する説明 夏目漱石を参照。『魯迅全集』第12巻281～282頁。
- (3) 周作人「留学の回想」(原題「留学的回憶」)、『葉堂雜文』94～95頁、新民印書館、1945年1月。
- (4) 周作人『魯迅の青年時代』、中国青年出版社、1957年3月。
- (5) 周作人「魯迅に関して」、周作人著・松枝茂夫訳『瓜豆集』266頁、創元社、昭和15年9月。
- (6) 平川弘祐「クレイグ先生と藤野先生——漱石と魯迅、その外国体験の明暗——」(『新潮』第70巻第2号、昭和48年2月)を参照。
- (7) 『魯迅研究・5』、中国社会科学出版社、1981年12月。
- (8) 丸山昇「日本における魯迅」、伊藤虎丸他編『近代文学における中国と日本——共同研究・日中文学関係史——』488頁、汲古書院、昭和61年8月。
- (9) 注8に同じ。
- (10) 劉柏青『魯迅と日本文学』89頁を参照、吉林大学出版社、1985年12月。
- (11) 藤井省三「檜山久雄氏の〈書評『ロシアの影』を読んで〉を讀んで」、『中国研究月報』No.451(1985年9月号)35頁。
- (12) 「ふと思いつく」を参照、『魯迅全集』第4巻26頁。
- (13) 王向遠著、『魯迅研究月刊』1997年第1号42～47頁。

付録：「魯迅と漱石」研究参考文献目録

★日本語部

【研究書】

1. 檜山久雄 魯迅と漱石、第三文明社、1977年3月。
2. 藤井省三 ロシアの影——夏目漱石と魯迅——(平凡選書87)、平凡社、1985年4月。
3. 李国棟 魯迅と漱石——悲劇性と文化伝統——、明治書院、平成5(1993)年10月。
4. 林叢 漱石と魯迅の比較文学研究、新典社、1993年10月。

【論文・資料】

1. 竹内好 魯迅と日本文学、『世界評論』第3巻第6号、世界評論社、1948年6月。
2. 竹内好「阿Q正伝」の世界性、『世界小説』1-7、1948年9月。
3. 荒木修 漱石と魯迅、『日本文学』第3巻第4号、日本文学協会、1954年4月。
4. 山本東作『クレイグ先生』と『藤野先生』、『魯迅の友会会

- 報』1955・11，魯迅の友会準備会。
5. 永島靖子『阿Q正伝』と『坊ちゃん』，同上。
 6. 千田九一 日本文学と魯迅との関係，『文学』第24巻第10号第29～36頁，岩波書店，1956年10月。
 7. 平川祐弘 クレイグ先生と藤野先生——漱石と魯迅，その外国体験の明暗，『新潮』第70巻第2号，昭和48年2月。
 8. 檜山久雄 魯迅，漱石序説（上），『文芸』1975年4月号
 9. 檜山久雄 中国の人生と日本の人生——魯迅と漱石，『文芸』1976年4月号
 10. 檜山久雄 伝統との対決または奴隷史観，『ユリイカ』1976年4月号
 11. 檜山久雄 近代の光と影，『第三文明』1976年5月号
 12. 檜山久雄 不明不暗に生きるもの，『第三文明』1976年6月号
 13. 檜山久雄 マルクス主義の魯迅的受容，『第三文明』1976年12月号
 14. 桶谷秀昭 檜山久雄の『魯迅と漱石』（書評），『月刊経済人』1977年6月号。
 15. 藤森節子 東洋の近代と文学の本体：檜山久雄「魯迅と漱石」（書評），『社会評論』11，1977年9月。
 16. 林連祥 魯迅の『クレイグ先生』——中国語訳に就て——，『比較文学研究』（東大比較文学研究会）第41号，1982年4月。
 17. 相浦泉 魯迅の散文詩集『野草』について：比較文学の角度から，『国際関係論の総合的研究』（大阪外国語大学），1983年3月。
 18. 林煥平著・鶴田義郎訳 魯迅と夏目漱石，『熊本短大論集』35巻1号（通巻72号），1984年5月。
 19. 檜山久雄（書評）藤井省三著『ロシアの影——夏目漱石と魯迅』，『中国研究月報』No. 449（1985年7月号），1985年7月。
 20. 藤井省三 檜山久雄氏の「書評『ロシアの影』」を読んで，『中国研究月報』No. 451（1985年9月号），1985年9月。
 21. 米田利昭「草枕」と「故郷」——楽園喪失をめぐって（付録：『坊ちゃん』と『阿Q正伝』），『近代文学における中国と日本——共同研究・日中文学関係史——』，汲古書院，昭和61年10月。
 22. 平川祐弘 漱石と魯迅——その留学体験の明暗，『国際交流』，昭和63年5月。
 23. 西原大輔（書評）『漱石と魯迅の比較文学研究』（林叢），『比較文学研究』66（東大比較文学会），1995年2月。
 24. 鳥井正晴 漱石と魯迅（その一）——中国講演の旅（上海篇）

——，『相愛国文』第8号，相愛女子短期大学国文研究室，1995年3月

25. 林叢 魯迅と白村，漱石，『比較文学』第37巻，1995年3月。
26. 齊藤順二 夏目漱石図書館資料室 藤井省三『ロシアの影——漱石と魯迅——』，『解釈と鑑賞』（特集 夏目漱石研究のために），1995年4月。
27. 趙建新『吾輩は猫である』と『阿Q正伝』——両作品の笑いの性質について——，『立命館文学』第546号，立命館大学人文学会，1996年8月。

★中国語部

【論文・資料】

1. 仲密（周作人）『阿Q正伝』，『晨報副刊』，1922年3月19日。
2. 周作人 関於魯迅，『宇宙風』第29号，1936年11月。
3. 周作人 関於魯迅之二，『宇宙風』第30号，1936年12月。
4. 周遐寿（周作人） 伍舍，画譜，『魯迅的故家』336～337，378～379頁，上海出版公司，1953年5月。
5. 許寿裳 西片町住屋，『亡友魯迅印象記』28～30頁，人民文学出版社，1953年6月。
6. 劉致中 魯迅と夏目漱石，『読書』1981年第3期。
7. 孫席珍 魯迅と日本文学，『魯迅研究』5，中国社会科学出版社，1981年12月。
8. 林煥平 魯迅と夏目漱石，『魯迅研究』1983年第3期。
9. 劉柏青 魯迅と夏目漱石，劉柏青著『魯迅と日本文学』第73～96頁，吉林大学出版社，1985年12月。
10. 藤井省三著・馬蹄疾訳 魯迅心中的夏目漱石，『魯迅研究』1991年第2期。
11. 程麻 夏目漱石の諷刺精神と魯迅の能動文学観——関於文学の倫理功能優勢的探討，程麻著『溝通与更新——関於魯迅と日本文学関係の考察』94～132頁，中国社会科学出版社，1990年。
12. 劉振瀛 夏目漱石の思想と前期魯迅思想，劉振瀛著『日本文学論集』，北京大学出版社，1991年2月。
13. 吳小美・肖同慶 人的期待と探尋，夢の失落と執着——魯迅と夏目漱石散文詩の比較研究，『文学評論』1991年第6期。
14. 王向遠 從“余裕”論看魯迅と夏目漱石の文芸観，『魯迅研究月刊』1995年第4期。
15. 王向遠 魯迅の『野草』と夏目漱石の『十夜夢』——散文詩の文体学的比較，『魯迅研究月刊』1997年第1期。